

令和3年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

道府県・政令市名【 福岡県 】

学校名【 朝倉市立比良松中学校 】

1 実践テーマ	Ⅲ Ⅳ
2 実施対象者 (学 年・人 数)	朝倉市立比良松中学校 全校生徒 163 名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 (保健体育科) ② 行事名 (パラスポーツ大会) ③ その他 (道徳科) (2) 地域における活動 ① イベント名 (後藤暢氏顕彰碑除幕式) ② その他 ()
4 目 標 (ねらい)	○パラリンピアンへの講演を通して、目標に向けくじけず未来を切り拓く姿の素晴らしさを感じとることができる。 ○オリンピックヘルシンキ大会で銀メダルを獲得された後藤暢氏（本校第一回卒業生）の偉業を顕彰するとともに、郷土・母校の発展に尽くそうとする心情・態度を育成する。
5 取組内容	(1) パラスポーツに挑戦しよう。 事前の取組 【保健体育】 保健体育科の授業として、12月3日(金)から全学年でゴールボールとボッチャの授業を行った。パラスポーツ競技を実際に体験することで、車いすテニスの川野将太選手の講話内容を身近に感じさせることをねらいとした。また、パラスポーツのルールを理解させることで、すべての人々が楽しむことができるスポーツの可能性について、考えさせた。 生徒は、それぞれの競技の特性やルールについて学習をし、主審や副審、ラインズマンや得点係の役割分担を行い、ゲームを盛り上げることができた。 (2) 後藤暢氏顕彰碑除幕式 【学校行事】  除幕式の様子  生徒会による碑文の朗読 後藤暢氏は、本校第一回の卒業生であり第15回オリンピックヘルシンキ大会において800m自由形リレーに出場し、銀メダルを獲得した選手である。しかし、彼の功績をたたえる記念碑は風化し、記念樹の存在も歲月とともに忘れ去られた状態であった。そこで、彼の偉業を顕彰するとともに、郷土・母校の発展に尽くそうとする心情・態度を育成することを目的として、東京2020オリンピック・パラリンピック大会の年に顕彰碑

を設立することとした。

当初は学校独自の取組と考えていたのだが、生徒だけではなく市内全体に後藤氏の偉業を広めたいという校長の考えもあり、市長や市議会議員を招待したイベントを行った。

当日は、市長と後藤氏の親族代表よりお言葉を賜るとともに、生徒会会長から後藤氏の偉業に学ぼうというあいさつ、生徒会代表生徒による後藤氏の偉業をたたえる碑文の朗読が行われた。生徒は、オリンピック銀メダルの偉業をなした後藤氏について知り、次は自分ががんばる番だという気持ちを高めていった。

(3) パラスポーツ大会を実施しよう。当日の取組一午前中―【学校行事】

体育的行事として、12月23日(金)の午前中にパラスポーツ大会を実施した。パラスポーツ大会のねらいは、前記の通りである。さらに、学年をこえて話し合い、協力し合いながらスポーツを楽しむことができるようにするため、体育委員会を中心として企画・立案を行わせた。また、体育祭の縦割り班を利用し、リーダーが3つの班を動かしながら、団結・協力してスポーツ大会を盛り上げていった。この大会には、アテネ・北京オリンピックのレスリング日本代表、地元出身の池松和彦選手を講師として招聘した。池松選手には開会式で、スポーツのすばらしさについて話していただき生徒の意欲を高めることができた。

ゴールボールでは、音だけを頼りに体ごとボールに飛び込んでいく姿や互いを鼓舞する姿が見られた。前年度、講演をいただいた浦田理恵選手のおかげで、東京2020パラリンピック大会でのゴールボールを観戦した生徒も多く、バウンズボールを投球したり、床をならしたりする姿も見られ、関心の高まりが実感できた。

ボッチャでは、異学年の6人一組のチームで望み、3年生を中心に知恵を出し合い勝利しようとする姿が見られた。また、本年度は、東京2020パラリンピック大会の影響もあり、「スギムライジング」をまねして投球する生徒もあり、パラスポーツへの関心が前年度の取組より高まっていた。



ナイスキャッチ



スギムライジング

(4) 川野将太選手特別講演会 当日の取組一午後―【道徳科】

12月23日(金)午後より道徳科の時間として、ロンドン・リオパラリンピック車いすテニス競技出場の川野将太選手の講演会を実施した。「未来を切り拓く」という演題で、アスリートとして活躍する川野選手の講演を通して、困難を乗り越えて心や自分の力で未来を切り拓く心を育成することをねらいとして行った。

まず、生徒は講演を受けてパラスポーツの意義について知り、川野選手が作成したビデオを鑑賞し車いすテニスのルールや競技の特性につ



川野選手の講演



生徒からの質問

	いて理解を深めていった。つぎに、川野選手の体験からどのような困難に対しても動じない心、「負けたくない」と思うことの大切さについて理解を深めることができた。最後に、生徒の質問の中から周りへ人への「感謝」の大切さについても伝えられ、生徒は共感的に話に聞き入ることができた。
6 主な成果	○生徒の感想から (1) パラスポーツ大会の取組【学校行事】 「縦割り班での活動だったので、日頃しゃべることができなかった先輩や後輩としゃべり、仲良くなることができました。パラスポーツの楽しさや難しさも分かりました。今後もっともっとパラスポーツが普及してみんなができるようになったらいいなと思いました。」 「私は、ボッチャを体験して、数人で知恵を出してアドバイスをしていくことでみんなが楽しく向き合えるスポーツだと感じました。」 「パラスポーツの魅力を感じることができました。目が不自由な人や体に障がいを抱えている人が、健常者と一緒にプレーできてともに楽しむことができると感じました。学年や性別も関係なく楽しむことができました。」 →パラスポーツが障がい者のみのスポーツではなく、すべての人々がスポーツの楽しさを実感するための工夫がされていることに多くの生徒が気づいた。 →すべての人が楽しめるスポーツを行うことで共生社会を作り上げていくことの大切さについて気づくことができた。 (2) 川野将太選手特別講演会【道徳科】 「一生寝たきりの生活かもしれなかったのに、諦めずに自分ができることを探して、プロテニスプレーヤーとして生きていくことを決めた川野選手はすごい人だと感じました。」 「急に障がいという現実を突きつけられながら、そこから見える今まで気づけなかった新しい世界を見つけることの感動があるんだなあとと思いました。もし自分が同じようになったら、失望してしまうと思います。しかし、そんな時は川野さんのように明るく進むことができたらいいいと思います。知ることは、自分の視野を広げ自分の生活をより豊かにすることができます。川野さんの貴重な話を聞けて良かったと思います。」 「野球をしながら、日頃から最も大切にしていることは「感謝」です。川野選手の気持ちを、更に大切にしながら「感謝」を意識していきます。」 「川野さんのように、常に諦めない心を持って勉強や部活動に取り組んでいこうと思いました。」 「厚い壁が目の前にでき、もう無理だと思うようなことがあっても、必ず目の前の希望に向かって、日々ゆっくりでもいいから前進していくことが一番大切だと分かりました。」 →障がいを持つ川野さんの人としての気高さや諦めない心について共感することができた。 →困難を克服しようとする強い意志について理解を深め、自分も負けないう意思をもつことができた。 →障がい者スポーツへの理解、ひいては障がいをもたれた方の生き方について触れることで、自己の考え方の幅を広げ豊かに生きていくことにつながることに気づくことができた。

	○教師アンケートとの結果から(4段階尺度方式) (1)パラスポーツ大会の取組【学校行事】 ①生徒が主体的に取り組み、スポーツの楽しさを実感することができたか。(3.9) ②パラスポーツに興味・関心を高め、学年・性別・障がいの有無に関わらずすべての人が参加できることを実感することができたか。(3.9) ③学年を超えて、共感的な人間関係や人間関係形成能力を高めるのに有効であったか。(3.8) (2)川野将太選手特別講演会【道徳科】 ①東京オリパラ 2020 パリオリパラに興味・関心を高める講演で会ったか。(3.7) ②生徒が講師の生き方に共感し、自分の生き方について考える内容であったか。(3.8)
7 実践において工夫した点 (事業の特色)	(1) パラスポーツに挑戦しよう。 事前の取組 【保健体育】 体育科の授業で、事前にルールやゲームの工夫点について考えさせることで、すべての人が行える競技であることに気づかせた。 (2) 後藤暢氏顕彰碑除幕式 【学校行事】 郷土のオリンピック・パラリンピアン の発掘と後藤暢氏の功績について、調査し、まとめた。市長や本校 PTA や本校同窓会役員も参加してもらい、地域をあげて取り組むことができた。生徒会役員との役割分担により生徒の参画意識を高めた。 (3) パラスポーツ大会を実施しよう。当日の取組一午前中ー【学校行事】 パラスポーツが共生社会の構築に沿ったものであることに気づかせるため、全校生徒を縦割り班で分割し、学年・性別関係なくチーム編成を行う工夫をした。 多くの人々の協力によって大会が成功することに気づかせるため、選手のみならず、大会運営や審判、ラインズマン、得点係などすべて生徒が役割分担を行い運営するための工夫をした。 (4) 川野将太選手特別講演会一午後ー【道徳科】 オリパラ・ムーブメント事業の趣旨を十分に理解している人に講演を依頼するため、(株)アソウ・ヒューマニーセンター・チームアスリートと連絡・調整を行い、講師選定をした。 講師代理人とのメールのやりとりや川野選手本人への電話連絡を行いながら、講演内容依頼や確認(道徳的価値)について何度も確認を行った。
8 主な課題等	(1)全校生徒が一斉に行うパラスポーツ大会では、ゴールボールやボッチャの道具が大量に必要な。それぞれの道具は代金が高いため買いそろえるのに困難である。前年度に必要な部数を買そろえる等の工夫を行っていた。 (2)大会運営にあたっては、大会会場の広さや1競技がどれくらいの時間を必要とするかなど、事前に確認しておく必要がある。また、パラスポーツの意義を生徒に理解させ、円滑に大会を進めるためにも、すべての教師が事前に競技を体験しておくことが大切である。
9 来年度以降の実施予定	○ 本校は、オリンピック・パラリンピックムーブメント事業を始めて、7年が終了した。九州北部豪雨の復旧工事の影響で、数年続けてきたマラソン・駅伝大会がここ2年実施できなくなっている。本年度は、前年に引き続きパラスポーツ大会を実施した。前述のように、パラスポーツやパラアスリートの講演を通して、生徒が共生社会について考えさせるきっかけづくりになったと思う。 また、本物のオリンピック・パラリンピアン の講演を聴くことで、自己の生き方についてより共感的に考えさせることができた。 H27 年 レスリング 池松和彦 H28 年 陸上競技 山本篤

	H29年 レスリング 伊調馨 H30年 マラソン 小嶋由水 R1年 陸上競技 中西摩耶 R2年 ゴールボール 浦田理恵 R3年 車いすテニス 川野将太 次年度以降も、生徒の実態や地域の実態に合わせねらいを少しずつ変え大会の実施を行ったり、講師の選定をしたりし、取組を継続させていく。
--	---